

野口英世と中南米 (1)

## 「サウスバンド」でパナマ運河を通行した 最初の日本人・野口英世

山 本 厚 子

私が長年の夢だった、「パナマ運河通行」を実現させたのは、1988年11月のことだった。

その頃パナマ共和国では、国内の混乱が1年以上も続き、米国が運河通行料不払いを含む、対パナマ経済封鎖を強行してからすでに8か月が経過していた。ノリエガ將軍の言動が国際的に注目される頃だった。

「この時期に運河を通行するのは難しいわよ。あなたも物好きね・・・」と、パナマ人の友人に笑われた。

しかし、日本海事協会パナマ支部の衣笠啓司氏のご尽力により、ノルウェー船籍で8万トンのコンテナ船、トルコイン号に乗船出来ることになった。

パナマの朝は、太平洋側のバルボア港の沖に停泊して運河通行の順番を待つ大小の船舶のエンジンの音で始まる。

一番に運河を通行する船は、4時すぎには沖を出発して半月型で白色のアメリカ橋の下を通り抜け、第一閘門のあるミラフローレスへと向かう。あたりはまだ薄暗く、運河の両側に並んだ照明灯が水面を青く照らしているだけである。

その日の朝、トルコイン号は8時に通行開始を許可されていた。6人乗りのランチに乗った私は、アメリカ橋を越えたところで待った。そして、巨船のタラップに飛び移り、12時間あまりの船旅が開始された。

全長80キロのパナマ運河は南北に伸び、大西洋に向かう方向が「ノースバンド（北進帯）」、その反対が「サウスバンド（南進帯）」と呼ばれる。

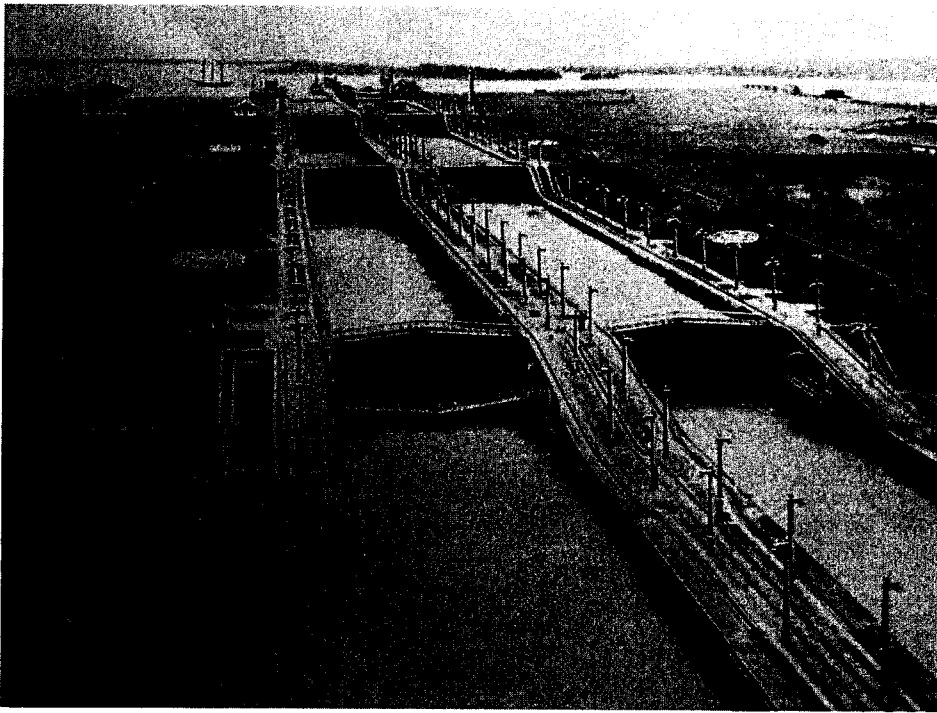
私の乗船したコンテナ船は、太平洋側のミラフローレス閘門で二段、ペドロ・ミゲル閘門で一段、約26メートル浮上し、そのままの水位で大西洋へと進んだ。

世界最大の人工湖・ガトゥン湖で大西洋側から南下してくる船舶の通過を待った。

ガトゥン閘門の左手にはチャグレス川を堰き止めたガトゥンダムが見える。

ガトゥン閘門は三段あり、一段約8.5メートルを三段一気に下ると、リモン湾に出る。すでに空には星が現れ、大西洋に出た時にはクリストバル港の街灯が点々と輝いていた。

パナマ運河の3ヶ所の閘門を通過する世界各国の船舶を数えきれないほど眺めたことがある。その様子は「船が山に登る」ように勇壮に見えた。しかし、実際に巨船の甲板に立



運河開通時のガトゥン閘門

ってみると、閘門で浮上している感覚はまったくなかった。

緑におおわれた運河の周囲の景色は、陸から見るよりはるかに雄大で美しい。心が躍るような、楽しく長い一日であった。

10年の歳月と3億8,700万ドルの工事費をかけて、米国の手によってパナマ運河が開通するのは1914年8月だった。しかし、運河の正常な運営のためには、中南米諸国で流行する黄熱病を撲滅する必要があり、米国政府の緊急課題であった。

そこで、ロックフェラー財団は黄熱病調査団をエクアドルの港町、グアヤキルに派遣することを決め、メンバー選出にあたり、ロックフェラー医学研究所で働く細菌学者の野口英世の名前が挙がったのである。

24歳の時、野口英世は片道切符でペンシルベニア大学のフレキシナー博士を頼って渡米した。その猛烈な研究態度で「野口英世は眠らない」と噂されながら、次ぎつぎと論文を発表する。梅毒のスピロヘータの発見などで、「世界のノグチ」と呼ばれるまでに出世する。ノーベル賞候補にも3度名を連ねた。

黄熱病研究のためにグアヤキルに派遣される調査団に参加要請があった時、野口は1週間考えてから「承諾」の返事をした。というのは、前年5月に腸チフスに罹ってから、再発、虫垂炎の手術と次ぎつぎと入院が重なり、体力を失い、健康に自信が持てなかったからである。

しかし、故郷の恩師・小林栄に、「今回、米国政府の陸軍部と衛生局の依頼により黄熱病研究のために南米エクアドルに出張すること

になりました。熱帯地方に出張するのは誰でも危険で怖がることですが、それほどのことは無いと思っています・・・」と、南米行きの決意を述べている。そして、妻メリー宛の遺言状を書き、遺髪を残してニューヨークを出発した。

1918年7月6日、野口英世は大西洋側のクリストバル港に到着した。彼は大西洋から太平洋への方向、「サウスバンド」でパナマ運河を通行した最初の日本人であった。

「午後、クリストバルに到着しました。検疫所のケーン博士がアンコンへの通行許可証を手配してくれました。古い友人であるマックファーランド博士が陸軍の士官として滞在しています。

楽しく夕食をとり、ホテルも快適で、論文の推敲<sup>すいこう</sup>をしたりして過ごしています。ペルー船でグアヤキルに行くことになっていますが、その船はまだ到着していません。

この地の病院や研究所などを視察するつもりです。実験用のモルモットも無事に到着しました・・・」

上司のフレキシナー博士にこう報告している。(1918年7月6日付『野口英世書簡集 II』野口英世記念会)

野口英世は大西洋側のクリストバル港で上陸して、パナマ鉄道に乗って太平洋側のパナマ市に移動した。宿泊先は、アンコンの丘の赤い屋根に白壁の瀟洒<sup>しょうしやう</sup>なティボリ・ホテルであった。

手紙の中に書かれている病院は、やはりアンコンの丘にある「アンコン病院」である。研究所というのは旧市街に近いベージャ・ピスタ地区の住宅街、フスト・アロセメーナ通



野口英世が滞在した  
ティボリ・ホテルのロビー

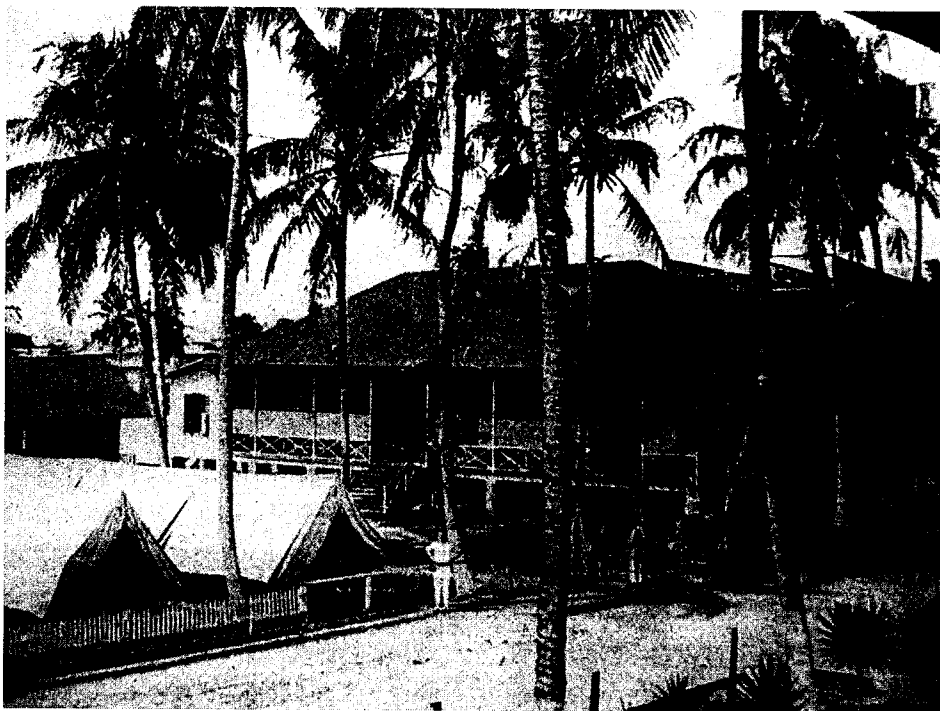
りに現在も所在する「ゴークス研究所」である。

黄熱病の感染媒体が蚊であると言う事を発見したのはキューバのカルロス・フィンレー博士であった。彼の説を信じて、米西戦争時にキューバのハバナ市で大清掃運動を実施し、パナマ運河の建設現場で蚊の駆除と衛生問題の解決に貢献したのが軍医のウィリアム・クロフォード・ゴークスである。

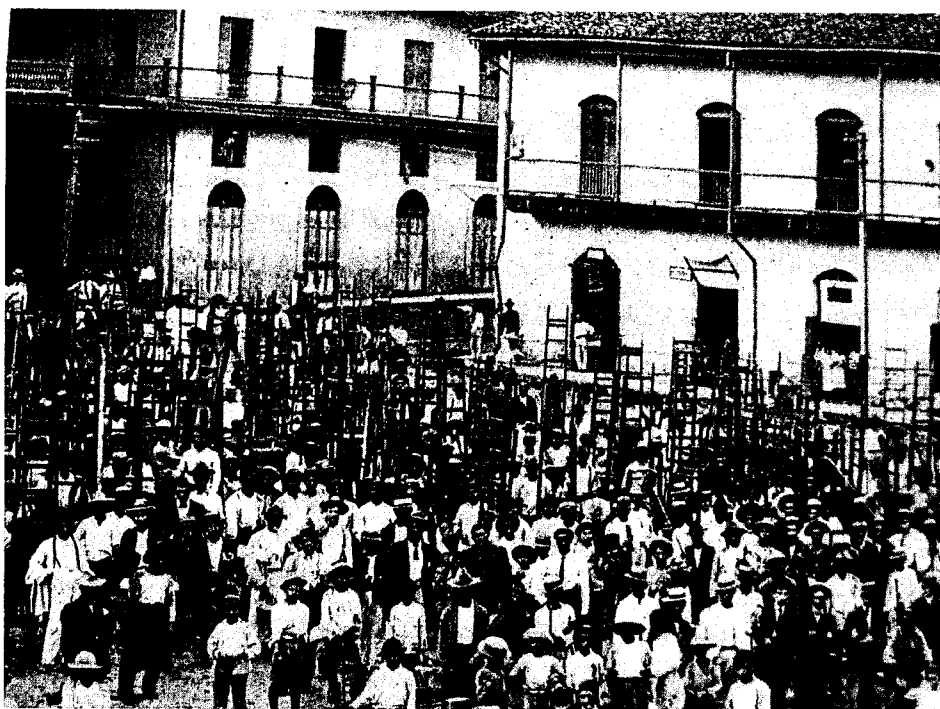
運河開通後、彼は米国議会から感謝状を授与され、軍医総監に昇格した。

パナマ市に数日滞在後、野口英世はペルー船籍のウカヤリ号に乗船した。向う先は赤道直下の港町グアヤキル。

(次号へつづく)



野口英世が実験を行ったアンコン病院



ゴース率いる衛生部隊

野口英世と中南米 (2)

## アンデス山中の「ノグチ小学校」

山 本 厚 子

1918年7月15日正午、ペルー船籍のウカヤリ号はゆっくりとエクアドルのプナ湾（現グアヤキル湾）に入港した。甲板に立って、緑の濃いバナナ畑、遙か彼方に連なるアンデスの峰々を眺めたのは野口英世であった。

白いパナマ帽とスーツ、黒縁の眼鏡をかけ、足にゲートルを巻いた姿で出迎えた新聞記者たちを驚かせた。さらに、「ノグチが他の医学者と異なるのはスペイン語を話すことだ」と翌日のエル・テレグラホ紙は報じている。

この先約10年間に及ぶラテンアメリカ地域での黄熱病研究の第1歩を、野口英世は赤道直下の港町、グアヤキルに印したのである。宿はティボリ・ホテルであった。

グアヤキルは、16世紀にスペイン人に設立された町だが、「環境が悪い」と2度も見捨てられた。しかし、インカ帝国の征服者ピサロの命令で、フランシスコ・デ・オレジャナによって再び建設された港町である。黄熱病、マラリア、ペスト、赤痢など伝染病の温床として、近隣諸国の旅行者から恐れられていた。

野口英世は上陸した翌日から黄熱病検疫所（現国立公衆衛生研究所）のひと部屋で研究を開始した。そして、9日目に診断したインディヘナの娘の血液を培養した中から、黄熱病の病

原体を発見する。それは「レプトスピラ・イクテロイデス」と命名された。

ただちに血清が製造され、実験台に立った山岳地帯の陸軍の兵士たちの多くが、命を救われることになる。陸軍は彼に名誉大佐並びに名誉軍医総監の称号を授与した。

そして、帰国を前にした野口のためにオルメド劇場で盛大な謝恩送別会が催された。この時から野口英世はエクアドルの国民的英雄として崇められることになった。



「野口英世生誕百年」の記念に1976年に発行された切手



グアヤキルの国立公衆衛生研究所の正面に掲げられている「黄熱病原菌発見」のプレート

1918年10月27日の夕方、野口英世は英国船籍のマナビ号に乗船してニューヨークへ戻って行く。船が出港する時、見送りの人びとは「ビバ・ドクトル・ノグチ（野口博士万歳）！アスタ・プロント！（またお会いしましょう）」と、口々に叫び、帽子を大きく振って別れを惜しんだ。

それから64年後の1982年の秋、私は日本政府の水産無償供与援助計画の通訳としてグアヤキルに滞在していた。その時、カウンター・パートに案内されて「カジェ・ノグチ」通りを歩き、新港への産業道路の中央分離帯に立つ野口英世の胸像と対面した。首都、キトにも「カジェ・ノグチ」が存在した。

「何故、赤道直下のエクアドルに日本の細菌学者の野口英世の名前を冠した通りや胸像があるのだろうか？」

それが、ラテンアメリカ地域における野口英世の黄熱病研究について私が興味を抱くきっかけであった。そして、野口英世の足跡を辿る私の長い旅が始った。

「アンデス山中にノグチ小学校があり、行事のある時には日章旗を掲げるそうだ」という話には特に驚かされた。

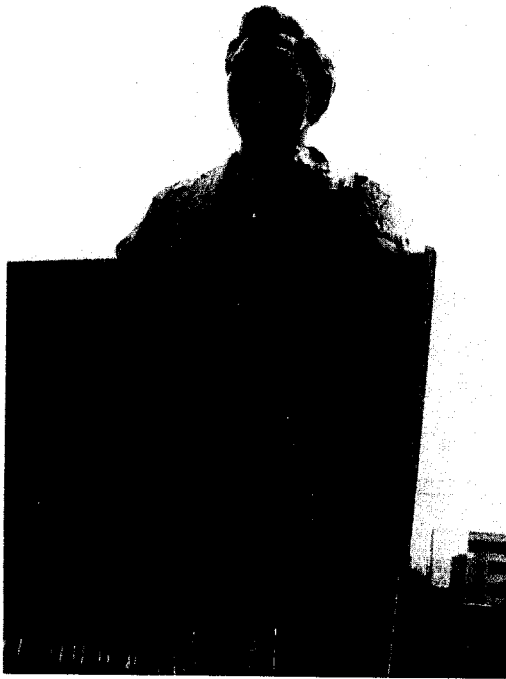
その後、この学校の生徒たちと野口英世の出身校である猪苗代の翁島小学校の生徒たちが絵画を通じて交流をしていることを知った。

この小学校の設立には次のようなエピソードがあった。

1918年当時、厚生大臣であったイシドロ・アヨラは野口英世にキトで会い、黄熱病研究について説明を受けた。そして、厚生大臣は、陸軍の兵士の命を血清で救ってくれたことに謝辞を述べた。



グアヤキルにある「カジェ・ノグチ」通りの標識



グアヤキルの日本庭園に移された野口英世の胸像

イシドロ・アヨラは野口の死後、大統領に就任した。そして、日本人、野口英世の遺徳を偲んでアンデス山中にあった小学校に「エスクエラ・フィスカル・ヒデオ・ノグチ（野口英世公立小学校）」と冠したのである。

グアヤキルに滞在してから2年後、私は翁島小学校の生徒たちの作文を持ってアンデス山中の「ノグチ小学校」を訪ねた。

キト市からパンアメリカン・ハイウェイで北東へ約40キロ、海拔約2000メートルの位置にグァイヤバンバ村がある。この国際ハイウェイはアンデス山中を北はコロンビアとの国境のトゥルカン市まで伸びている。

盆地の村の住宅街にその小学校はあった。外観はまったく個人の家のようなものであるが、鉄格子の入り口に「エスクエラ・フィスカル・ヒデオ・ノグチ」と書かれた看板が架かっていた。年度末の冬休み中で子供たちの姿はなかった。



グァイヤバンバ村の「ノグチ小学校」の女子生徒たち

小さな校庭の両側に教室が合計8室並んでいた。教室の屋根はトタン葺きで、部屋の天井には裸電球が下がっていた。校庭の隅に遊び場がある。そして、校庭の中央に3本のポールが立っていた。学校行事の時に、この1本に日章旗が掲げられるという。

・・・昨年、2004年5月、私は再びこの学校を訪れた。

今回は、学校の入り口の廊下に、白いブラウスに格子縞のジャンパースカートの女子生徒が両側に並び、エクアドルと日本の国旗の小旗を振って私を出迎えてくれた。

校舎は拡張工事中であった。新たにコンピュータ室もあった。パトリシア・ベナルカサル校長は眼鏡をかけ、モスグリーンの制服姿で他の先生たちと笑顔で生徒の前に立っていた。

校庭の日章旗を掲げるポールの前に整列した

296名の全校生徒は「ブエノス・ディアス！ビエン・ベニーダ！（おはようございます。ようこそいらっしゃいました）」と大きな声で挨拶してくれた。ジャージーの胸にH.N.と野口英世のイニシャルの文字が見える。

校舎の壁に、野口英世の生涯を描いた絵画が20枚ちかく貼られていた。「博士の伝記を参考にして生徒たちが描きました。明日は博士のご命日ですから」と、校長は説明した。ちょうど翌日は野口英世の77回忌にあたる日であった。

「野口博士のように一生懸命勉強します」と、ひとりの生徒が言った。

黄熱病撲滅を目指して、猛烈な研究態度で精進した野口英世のことを、アンデス山中の「ノグチ小学校」の先生、生徒たちは今でも語り継いでいるのだった。

(次号へつづく)



野口英世と中南米 (3)

## ユカタン半島で野口英世を信奉する一家

山 本 厚 子

メキシコのユカタン半島は、古代マヤ文明の遺跡、チチェンイツァ、ウシュマル、カバーなどを訪れる観光客で一年中賑わっている。マヤ遺跡の宝庫である。

観光の基点となるメリダ市は、半島の北西に位置し、旧市街には白いしっくい壁の家並みが続き、街角を歩く市民のまとう白い服装から「白い都」の愛称で親しまれている。

私は70年代から、この半島に点在するマヤ文明の遺跡に魅せられて観光旅行に出かけたひとりである。遺跡の近くの小さな村でハンモックに寝たこともある。グアテマラとの国境のジャングルの中のボナンパックの遺跡にまで足を伸ばした。

壮大なピラミッドの壁面のレリーフや神殿の壁画に描かれたマヤ人の前で、夢中でカメラのシャッターを押した。半島の北東部、イスラ・ムヘーレス島のエメラルド色の美しい海では海ガメや熱帯魚と泳いだり、すべてが昨日のように思い出される。

1919年の夏、メリダ市の人びとは黄熱病の恐怖に脅えていた。そして、州立医薬科大学の学長、フランシスコ・コロメはニューヨークのロックフェラー医学研究所宛に「是非と

も野口英世博士に黄熱病の調査研究をお願いしたい」という旨の要請書を送った。

前年にエクアドルのグアヤキルで黄熱病の病原菌を発見した「ロックフェラー医学研究所の野口英世」の名前は、ラテンアメリカ地域の隅々まで知れ渡っていた。

そして、その年の12月23日の夕方、野口英世はユカタン州立医薬科大学の要請に応じて、メリダ市にやって来た。

メリダの街は碁盤の目のように道路が通っている。南北の通りには偶数番号、東西に伸びる路には奇数番号が付けられている。

野口の滞在先は62番街と59番街の角、「ホテル・マドリッド（現在のレフォルマ）」の2階奥の広い部屋であった。

町の西部、イトゥエサス通りと旧市街に通じる59番街の角に大学がある。ホテルから徒歩で約10分の距離である。大学の校舎と道路を隔てた向かい側のオーラン附属病院の1室が野口の研究室となる。すぐに不眠不休の研究が開始された。

研究の合い間に、講演や実験が行なわれ、野口は実験動物の写生に彩色して学生に見せたりした。黄熱病に罹った患者から毎日血液を採取し、それは培養基と動物とに接種され

